

## 根本仏教における苦の超克

銚之原 善章\*

### The Overcoming of Suffering in the Fundamental Buddhism

Yoshinori Hokonohara

The purpose of this paper is to clarify what "the overcoming of suffering" at which the fundamental Buddhism aims is. The overcoming of suffering is the state that becomes possible in "Nirvana(nibbāna)". What is this? According to a predominant opinion of today's Buddhism study, it is a state of the mind of man from whom desire and evil passion disappear. Therefore, Buddhism reasons that these should be eliminated in order to realize the overcoming of suffering and thus the state of Nirvana.

However, Sakyamuni considers the Nirvana to be a certain root truth that is called "Holy Truth (ariyasacca)". It is a transcendent place that has no phenomenon at all. Nevertheless, it is not excluded from all phenomena but is in all phenomena. How should we arrive at such a Nirvana for the overcoming of suffering? Sakyamuni explains "concentration(samādhi)" as "the road that arrives at the Nirvana". Concentration on a certain phenomenon realizes its truth. And this truth is the Nirvana. Also, to realize the Nirvana by concentration to a phenomenon is to arrive at the Nirvana as to overcome suffering.

Thus, the overcoming of suffering is the realizing of the Nirvana as the arriving at the Nirvana, and this happens in a concentration on a phenomenon. Therefore, the overcoming of suffering is, as for our more concrete way of living, the devoting ourselves to our given life and the living in it sincerely. This rather exceeds our life and suffering.

\* キーワード ; 苦の超克、根本仏教、縁起説、涅槃、涅槃への往生、生への徹底

#### はじめに

仏教は、釈尊(Sakyamuni 釈迦族の尊者の意 本名 ; Gotama Siddhattha 463-383)が、生老病死等の人間苦の問題を解決するため、29歳の時出家し、6年後の35歳の時、「正覚」(sambodhi)と言われる根本経験によってこの問題を解決した、すなわち、苦を超克した、ということに始まるとされる。(注1) したがって、仏教の目標は苦の超克であるとされるのである。しかれば、釈尊が達成した「苦の超克」はいかなることであつたのであろうか。

これについては、実は、今日、筆者の見るところでは、釈尊が説いたその真意とは大きく隔たった理解がなされ、これが定説として支配しているように思われる。そこで、本稿は、根本仏教(釈尊の説法集と見なされる原始經典に示されている釈尊の仏教)における「苦の超克」の真意を、パーリ語原始經典「五部」(Pāṇcā-nikāya, Pali Text Society)に依拠して、明らかにすることを試みたい。

---

\* 教養部

## 1. 根本仏教における苦の超克についての仏教学的な理解

### (1) 苦の超克の境地としての「涅槃」についての理解

まず、原始経典を研究して根本仏教を明らかにすることを使命としている仏教学が、今日、この苦の超克をどのように理解しているかということを見ることにする。

仏教では、一般に、目標として目指される苦が超克される境地は「涅槃」(nibbāna、梵語; nirvāṇa)と言われている。苦の超克が目指されて、実際は涅槃が目指されるのである。それでは、仏教学では、今日、この涅槃はどのように理解されているであろうか。そこでまず、涅槃について述べている仏教学者の言葉を列挙することにする(文中の太字ゴシック体での強調は本稿筆者による)。

「涅槃は滅理で、空無、即ち何物も無いもの、であるから、今まであった**煩惱が無となって、何物も無いことになった場合**である。」(宇井伯壽『佛教汎論』1962、岩波書店、12頁)

「**愛(=「渴愛ともいうて、無限常住を求めて自分を主張して止まない根本の欲望」**＝一切の煩惱の「根本」)**を制し切って仕舞って、実際愛に束縛せられないような状態**になった時が涅槃寂靜であります。それが仏教の最後の目的であります。涅槃寂靜を得れば、仏になったのであります。」(宇井伯壽『佛教思想の基礎』1963、大東出版社、123頁)

「涅槃(nirvāṇa, nibbāna)とは、nir-vā-aṇa『吹き消すこと』または『吹き消されている状態』を意味する。つまり**煩惱の火を吹き消すこと**が涅槃である。原始経典では涅槃を定義説明して、『すべての貪欲の滅尽、瞋恚の滅尽、愚痴の滅尽、これを称して涅槃という。』とされている。涅槃は寂靜にして**無苦安穩の理想境**であるというのが涅槃寂靜である。」(水野弘元『仏教要語の基礎知識』1972、春秋社、153-4頁)

「滅とは・・**渴愛が残りなくすべて滅すること**である。渴愛は一切の煩惱を代表したものであるから、滅とは**一切の煩惱が滅尽した状態**であり、それは涅槃のことである。」(同 183頁)

「**ゴータマ・シッダールタが・・到達した正覚(さとり)とは、・・『人間の迷妄が断ち切られた』**ということである。・・それを涅槃ともいう。涅槃というときは、・・『自分を大事に思い自分の物を大切に思ってそれに愛着を起し、それが果たされない場合に瞋憎怨が起こる』といったときの、その主質である愛憎の念が火の燃ゆる姿に喩えられ、その**愛憎の止滅**を“火の消滅”と考えての思想である。」(山口益『仏教思想入門』1968、理想社、97頁)

「・・釈尊は教えた。『この世において見たり聞いたり考えたり識別した快美な事物に対する**欲望や貪りを除き去ること**が、不滅のニルヴァーナの境地である。このことをよく知って、よく気をつけ現世において全く煩いを離れた人々は、常にやすらぎに帰している。世間の執着を乗り越えているのである。』だから『美しいかたちに愛着を起すな』と説いている。」(中村元『原始仏教 その思想と生活』1970、日本放送出版協会、108-9頁)

「涅槃」についての以上の説明によると、涅槃とは次のようなものである。

- ・「煩惱が無となって、何物も無いことになった場合」
- ・「根本の欲望」である「愛を制し切って仕舞って、実際愛に束縛せられないような状態」
- ・「煩惱の火」が「吹き消されている状態」
- ・「人間の迷妄が断ち切られ」て、「愛憎の止滅」した状態
- ・「欲望や貪りを除き去ること」

このように、涅槃は、おおよそ、＜「渴愛」(taṇhā 愛)と言われる根本の欲望とこの欲望から生ずる一切の煩惱とが消滅した人間の心の状態＞として理解されていると言える。(注2)

この状態は、また、「無苦安穩」の境地、すなわち、一切の苦悩もない状態とされる。それは、苦悩は、欲望が存して、それがかなえられないことから生ずるものとされるのであるが、この涅槃の状態ではその欲望が消滅しているからである。(注3)「渴愛」とと言われる根本的な欲望が苦の

起因であることは、実際、次のように、釈尊によっても説かれているのである。

「比丘たちよ、苦の起因という聖なる真理はこれである。再生するものであり、歓喜と貪欲を伴い、ここかしこで歓喜する渴愛(taṇhā)、すなわち欲愛(kāmatāṇhā 諸欲充足追求愛)、有愛(bhava-tāṇhā 生存愛)、無有愛(vibhavataṇhā 逃避的非生存愛)がそれである。」[「相応部經典」(Saṃyutta-nikāya) 第5巻 421頁]

ともあれ、「渴愛」と言われる一切の煩悩を引き起こす根本的な欲望は苦の起因とされるが故に、その根本的な欲望が滅している状態とされる涅槃においては苦も滅しているとされるのである。

## (2) 涅槃を可能にするものとしての「縁起の法」の覚知

それでは、そこでは苦が超克されているこのような涅槃はいかにして可能になるのであろうか。涅槃は、「渴愛」と言われる根本の欲望とこの欲望から生ずる一切の煩悩とが消滅した心の状態であった。そうするならば、このような涅槃を可能にするためには、「渴愛」という根本の欲望を消滅させなければならないということになる。渴愛は、上に「自分を大事に思い自分の物を大切に思ってそれに愛着を起し、それが果たされない場合に瞋憎怨が起る」と言われていたようなものである。このような渴愛は何故起こるのであろうか。それは、仏教学者によると、「自分」と「自分の物」が実在すると固く信じているからである。しかし、自分と自分の物及び他の一切の物が実在するということは真実ではないのである。したがって、このことを信じていることは真実を知らないという無知、あるいは「無明」(avijjā)なのである。上掲の仏教学者の言葉ではこれが「人間の迷妄」とも言われていた。確かに、釈尊も、「相応部經典」第2巻 1～133頁における「因縁相応」(Nidāna-saṃyutta)に集められている「十二縁起の説法」において、苦の起因として「渴愛」のみならず、さらにその根本の起因として「無明」を説いているのである。その説法は次のようなものである。

「**無明によって**(avijjāpaccayā 無明の縁から)行はあり、行によって識はあり、識によって・・・、名色によって・・・、六処によって・・・、触によって・・・、受によって・・・、**渴愛によって・・・**、取著によって・・・、有によって生はあり、生によって**老死・愁・悲・苦・憂・悩は生ずる。**」

(注；太字ゴシック体による強調は本稿筆者による。)

それでは、真実はいかなることであろうか。それは、仏教学者によると、一切のものは縁(原因)によって起こっているものであり、すなわち、他の物との関係においてのみ仮に一時的に存在しているものであり、他との関係を離れてそれ自体においては何らの実体性をも有していないものであるということである。「自分」も「自分の物」も、その他一切の物もほんとうは実体なきもの、実在しないものなのである。そして、まさにこのことを釈尊は「正覚」の根本経験によって悟ったとされるのである。その根拠は何であろうか。それは上掲の釈尊の「十二縁起の説法」であるとされるのである。このことは、例えば、次のように言われる。

「・・・[無明から苦までの]十二の支分は一切法[=一切のもの]の代表として出されているのであり、従って十二の支分の間にそれぞれ縁起の関係があることが説かれることによって、そこに、一切法の縁起が説かれたことになるのである。」(山口益、横超慧日、安藤俊雄、船橋一哉『仏教学序説』1961、平楽寺書店)(注；[ ]内は本稿筆者による補充)

一切のものは縁によって起こっているという説は「縁起説」と言われる。仏教学者によると、釈尊の仏教の、さらにはそこから出てきた全ての仏教の、根本説はこの縁起説であるとされる。そして、この縁起説は無実体説、無我説、無常説とほとんど同じであるとされる。そこで、このようなことを述べている仏教学者の言葉を挙げることにする。

「・・・凡てのものが直接間接に関係し合うて居るのであって、人生の一切は悉く縁起であり、関連の上に現れているものなることが判る。一切を縁起と見るのは一切を実体視することとは異なる

っている考であって、一一のものに固定的実体を認めない説であり、これが無我説たる所以である・・・」(上掲、宇井伯壽『佛教汎論』199-200頁)

「根本仏教の根本思想は全く縁起説、即ち相依説、であって、これが全仏教の根本思想であり、・・・」(同 264 頁)

「仏陀の縁起における無我の立場は、・・・・物にせよ、心にせよ、すべてのものが本来空である。そこには何らの実体性もない。これを実在する如く考えるのは真理に対する無知、すなわち無明によるのであって、このようなあやまれる思惟の成立の事情や、その恐るべき結果を徹底的に究明し、すべてのものが何ら実体性を持たぬことを覚証する智慧が必要であると説く。」(上掲、山口益他『仏教学序説』7頁)

「・・仏陀の成道は縁起の自覚によると見ることができるが、このことは、仏教の教義はすべて『縁起』という泉から流れ出た大河小河の如きものである、ということを表していると思われる。」(同 67 頁)

「原始仏教から大乘仏教にいたるまで、インドの仏教から中国や日本の仏教にいたるまでのすべての仏教は縁起説をその中心思想としている。故に縁起説が十分に理解されるならば、仏教そのものが理解されるのである。縁起説こそは仏教の中心思想であるとともに、仏教が他の宗教や哲学と違っている仏教独自の特徴を示すものであるといえる。」(上掲、水野弘元『仏教要語の基礎知識』159頁)

以上のとおり、今日、仏教学では、仏教の始源にある釈尊の「正覚」は、一切のものは直接間接の数限りない縁(原因)によって一時的に起こっているものであり、それらの縁を離れてそれ自体においては何らの実体性をも有しないもの、空無であるという「縁起の法」の覚知であったとされるのである。そして、このことが覚知されるならば、「自分を大事に思い自分の物を大切に思ってそれに愛着を起す」といった「渴愛」は消滅し、さらにこれを起因とする一切の煩悩や苦も消滅し、涅槃という「無苦安穩の理想境」が可能になるとされるのである。

### (3) 苦の超克についての仏教学的な理解への疑問

仏教学の定説的な理解によると、根本仏教における苦の超克は涅槃を達成することによって可能になるものであり、その涅槃は、上述の通り、「渴愛」と言われる根本の欲望とこの欲望から生ずる一切の煩悩とが消滅した人間の心の状態であるとされる。そして、一切の欲望と煩悩とが消滅するのは、一切のものは縁によって起こっていて、それ自体においては実体なきもの、空無であるという「縁起の法」を悟ることによってであるとされるのである。

しかし、根本仏教における苦の超克が涅槃に到ることによって可能になると解するのは正しいとしても、その涅槃を、自分と自分の物に愛著する根本の欲望とそれに基づく一切の煩悩とが滅尽した心の状態であると解するのは、果たして正しいであろうか。仏教学者はそう解するが故に、根本仏教では欲望を捨てることが説かれているとしばしば述べている。例えば、次のようにである。

「仏教の実践法として説かれていることは、いろいろあるが、その根本はわれわれの迷いを起こさせる欲望を捨てるということであった。」(上掲、中村元『原始仏教 その思想と生活』67-8頁)

「原始仏教では、これらの煩悩・欲望をのり超えることを説いた。欲望をすてれば苦しみはなくなる。」(同 70 頁)

しかし、そもそも欲望は生命が自らを保持し発展させるために起こす生命現象であって、これを否定することは生きることを否定することになるのではないだろうか。人間が生きながら、同時に欲望を捨てるということは矛盾したことであり、不可能なことではないだろうか。したがって、欲望と煩悩が消滅した状態であるという涅槃も実際は達成不可能なものではないだろうか。



確かに、釈尊によって、渴愛が減することによって苦が減することや(「十二縁起の説法」)、「貪欲の滅尽、瞋恚の滅尽、愚痴の滅尽、これが涅槃と言われるのである」(「相応部經典」第4巻 251頁)ということは説かれている。しかし、この場合の「滅」や「滅尽」は、文字通りの現象的な意味よりももっと深い意味を表しているのではないだろうか。

ともあれ、涅槃を、仏教学者が解するように、欲望や煩悩が消滅した心の状態とするならば、そのような涅槃は達成不可能なものであり、このような涅槃によっては苦の超克の問題は解決されないのではないだろうか。

さらに、仏教学者は、欲望や煩悩が消滅した心の状態という涅槃は、一切のものは縁によって起こっており、他との関係においてのみ存し、それ自体では実体なきものであるという「縁起の法」を悟ることによって可能になるとする。そして、この縁起説こそが、根本仏教の、さらには、全仏教の、根本説であると主張する。しかし、一種の因果律説に無実体・空無説を結びつけたものと考えられるこの縁起説は、ほんとうに根本仏教の根本説であるのだろうか。これは極めて疑わしいことである。何故なら、一切のものは縁によって起こっているとする縁起説は、上述のように、釈尊の「十二縁起の説法」の一つの解釈として主張されているに過ぎず、原始經典のどこにも直接には説かれていないからである。縁起説が根本仏教の根本説であるとするのは、この説が今日殆ど定説として支配していることを考えると、大いなる誤解なのではなかろうか。(注4)

## 2. 根本仏教における苦の超克の真意

### (1) 苦及び一切の現象を貫き越えた真理としての涅槃

#### (i) 苦及び一切の現象を超越した真理としての涅槃

上述のように、そこで苦が超克されるところの涅槃が、仏教学者が解するように、欲望や煩悩が減尽した心の状態であるとするならば、そのような涅槃は殆ど達成不可能なものであると考えられた。しかし、釈尊は、確かに、渴愛が減することによって苦が減するとか、貪欲、瞋恚、愚痴等の煩悩の滅尽が涅槃であるとかと説いているのである。そこで考えられることは、釈尊が説いている渴愛、苦、煩悩といった現象の「滅」とか「滅尽」とかは、現象的な意味での滅あるいは滅尽ではないのではないかということである。

涅槃が、現象的な意味で、欲望や煩悩が減尽した心の状態であるとされているのであれば、そのような涅槃もまた一現象であると言える。しかし、釈尊は次のような涅槃に関する説法を行っているのである。

「世尊は涅槃に関する法話によって比丘たちに教示し、激励し、鼓舞し、欣喜せしめた。彼ら比丘たちは理解しようとし、思惟し、一切の事柄に注意を払い、耳を傾けて法を聴いていた。すると、世尊はこのことを知って、その時、この感興語を発せられた。

『比丘たちよ、このような処がある。そこは地もなく、水もなく、火もなく、風もなく、虚空無辺処もなく、識無辺処もなく、無所有処もなく、非想非非想処もなく、この世もなく他の世も、日月の両者もない。それを私は、比丘たちよ、来とも言わず、往とも、住とも、死とも、生とも言わない。まさにこれは止住なく、転起なく、対境なきものであり、これこそが苦の終り(anto dukkhassa)なのである。』[「自説経」(Udāna 感興語) 80頁]

この説法では、そこではいかなる現象もない処(āyatana)がある(atthi=is)と言われている。この説法は涅槃についての説法であるから、これは明らかに涅槃のことを言っているのである。そして、これこそが「苦の終り」(anto dukkhassa)であると言われている。ここでは、涅槃は少なくとも現象の世界とは異なるものとして言われているのである。さらに、涅槃については次のようにも説かれている。

「世尊は涅槃に関する法話によって・・・・この感興語を発せられた。

『比丘たちよ、生ぜざるもの、あらざるもの、為されざるもの、作られざるものがあるのである。比丘たちよ、もしその生ぜざるもの、あらざるもの、為されざるもの、作られざるものがあるのではないとすれば、ここでは生ぜるもの、あるもの、為されたるもの、作られたるものの出離は証智されないであろう。しかしながら、比丘たちよ、生ぜざるもの、あらざるもの、為されざるもの、作られざるものがあるが故に、生ぜるもの、あるもの、為されたるもの、作られたるものの出離は証智されるのである。』(同 80-81 頁)

この説法によると、涅槃は、「生ぜるもの、あるもの、為されたるもの、作られたるもの」である現象に対して、「生ぜざるもの、あらざるもの、為されざるもの、作られざるもの」(ajātaṃ abhūtaṃ akataṃ asaṃkhatam)とされ、それがあつた(atthi)と言われている。しかも、それは「生ぜるもの、あるもの、為されたるもの、作られたるもの」である現象の「出離」(nissaraṇam)であるとされていると解せられる。

以上の涅槃についての釈尊の説法から、涅槃は、そこではいかなる現象もない「処」であり、「苦の終り」であり、さらに、現象の「出離」である。しかも、このような涅槃が「ある」と言われているのである。

ここでは涅槃が「苦の終り」と言われているが、これは「苦の滅」(dukkhassanirodha)とも、「苦の出離」(dukkhassa nissaraṇa)とも言われているものである。特に、「苦の滅」は、釈尊の「四つの聖なる真理」(cattāri ariyasaccāni 四聖諦)の説法において、「苦」、「苦の起因」、「苦の滅に導く道」と共に「聖なる真理」と呼ばれ、釈尊の説法において頻出する語である。この「苦の滅」がまた時に、例えば、次の釈尊の説法に見られるように、「苦の超越」(dukkhassa atikkama)と表現されることもあるのである。

「正しい智慧によって、聖なる真理を、苦を、苦の起因を、苦の超越を、苦の寂滅に導く聖なる八支の道を見るが故に、・・・全ての繫縛の滅尽により、苦の終りをなす者となる。」[「如是語経」(Iti-vuttaka)17～18 頁] (注 5)

以上の通り、涅槃が「生ぜざるもの、あらざるもの、為されざるもの、作られざるもの」、「生ぜるもの、あるもの、為されたるもの、作られたるものの出離」、「苦の終り」と言われ、さらに、「苦の滅」、「苦の出離」、「苦の超越」と言われていることから、涅槃は苦及び一切の現象を超越したものであると見なされていると言えよう。

このように、根本仏教では、「涅槃」と言われるような或る超越的なものが説かれており、しかもこれが釈尊の殆ど全説法の主題となっているものである。これは、一切の現象を超越したものであるが故に、「現象にあらざるもの」として、次のように、現象を表す語に否定語を付けて表現されるのである。

「現象の滅(nirodha)」、「現象の滅尽(khaya)」、「現象の捨棄(pahāna)」、「現象の遠離(virāga)」、「現象の終り(anta)」、「現象の出離(nissaraṇa)」、「無・非・不—現象」(a—)等々。

釈尊の説法のほとんどのものに登場するこのような否定語は、「現象を滅尽する」という「現象」を表しているのではなく、釈尊がまさにそれをこそ説こうとしている、現象を超越した或る真理を表しているのである。

今日の仏教学の根本的な誤りは、このことを理解せず、これらの否定語を、文字通りに現象を表すものとして理解している点にあると言えよう。例えば、仏教学は、「苦の滅」、「煩惱の滅尽」という表現を、上に述べたように、文字通りに現象的に苦や煩惱が消滅すること、なくなることと解するのである。そして、このことの結果、仏教は何らの超越的なものをも説かず、専ら人間と人間のあり方のみを説くものであると見なして、「仏教はすべて人間学の性格をもつものである」(上掲、山口益他『仏教学序説』27 頁)とか、「佛教は凡て倫理道德に外ならぬ」(上掲、宇

井伯壽『仏教汎論』176頁)とか、仏教は「善き人々の正しい礼法・道德」の教えである(上掲、中村元『原始仏教 その思想と生活』96頁)とかと、仏教が理解されることになるのである。

しかしながら、根本仏教は現象を超越した或る真理を説くものなのである。そして、その真理は、現象にあらざるものとして、現象とそれを否定する語とでもって表現されるのである。このことの例をさらに挙げる。

「比丘達よ、汝達に涅槃と涅槃に導く道とを(nibbanañca nibbanagāmiṃ ca maggam) 説こう。これを聴け。では、比丘達よ、いかなるものが涅槃であろうか。比丘達よ、貪欲の滅尽、瞋恚の滅尽、愚痴の滅尽(rāgakkhayo dosakkhayo mohakkhayo)、これが、比丘達よ、涅槃と言われるのである。では、比丘達よ、いかなるものが涅槃に導く道であろうか。止(samatho 寂止)、これが、比丘達よ、涅槃に導く道である。」(「相応部經典」第4巻 371頁)

この説法では、まず、釈尊の仏教の眼目であるところのものが「涅槃」の語でもって示され、それが「貪欲の滅尽、瞋恚の滅尽、愚痴の滅尽」であるとされている。この表現によって、涅槃は貪欲、瞋恚、愚痴といった煩悩やその他一切の現象を超越したものであるということが言われているのである。次に、この説法では、この超越的な真理に導く道として「止」、すなわち心を何かに止め、定める行である「三昧」(samādhi 定)が示されている。この説法は、釈尊の仏教、根本仏教が説こうとする最重要事を簡潔に述べているものと解せられる。

なお、この説法が記載されている経は、「相応部經典」中の「無為相応」(Asaṅkhata-samyutta)に属しているものであるが、ここには上掲の説法の「涅槃」を他の語に言い換えただけのなお多くの経(32経)が存している。これらは、「涅槃」と同様に、根本仏教が説く超越的な真理を表す涅槃の別名・同義語であると考えられる。それらを次に挙げることにする。

無為(asaṅkhatam)、終極(antam)、無漏(anāsavam)、真理(saccam)、彼岸(pāram)、巧妙(nipuṇam)、極難見(sududdasam)、不老(ajajjaram)、堅牢(dhuvam)、照見底(apalokitam)、不可見(anidassanam)、無迷執(nippapam)、寂靜(santam)、不死(amatam)、極妙(paṇītam)、安泰(sivam)、安穩(khemam)、愛滅(taṇhakkhayo)、不思議(acchhariya)、未曾有(abbhutam)、無災(anītika)、無災法(anītikadhamma)、無悩害(avyāpajjho)、離貪(virāgo)、清淨(suddhi)、解脫(mutti)、無執着(anālayo)、洲(dīpa)、避難所(lena)、救護所(tāṇam)、歸依所(saraṇam)、到彼岸(parāyaṇam)

これらは、根本仏教が説くところの、現象を超越した真理を、それがもつ様々な特徴を捉えて表しているものと解することができるであろう。

## (ii) 苦及び一切の現象においてある真理としての涅槃

以上のとおり、根本仏教においては現象界を超越した或る真理が説かれており、その名称の一つが「涅槃」であった。そして、その涅槃に到ることによって苦が超克されるのであった。ところで、その涅槃は現象界を超越して「どこに」存するのであるだろうか。

これに関連して、「増支部經典」(Aṅguttara Nikāya)第2巻には、この涅槃が「世界の終り」(lokassa anta)と表されて、この「世界の終り」に関する「赤馬天子」と釈尊との次のような興味深い問答が記されている。

『尊者よ、そこでは生まれることも、老いることも、死することも、没することも、再生することもない世界の終りは、尊者よ、一体、行くことによって知ることや見ることや到達することができるではありませんでしょうか?』

『友よ、そこでは生まれることも、老いることも、死することも、没することも、再生することもないかの世界の終りは、行くことによって知られ得るとか、見られ得るとか、到達され得るとかは私は説かないのである。』(47-48頁)

このあと、赤馬天子は、自分は過去世において「赤馬」という名の仙人であって、虚空を矢の

ように速く走り、西海から東海までまたぐことができる神通力を持っていて、その神通力で百年間ひたすら世界の終りに到達しようとしたけれども、それを果たさずに途中で死んでしまったということを語り、この釈尊の答語を讃嘆した。これに対し、釈尊は次のように述べている。

「友よ、そこでは生まれることも、老いることも、死することも、没することも、再生することもないかの世界の終りは、行くことによって知られ得るとか、見られ得るとか、到達され得るとかは私は説かないのであるが、しかし、私は、友よ、世界の終りに到達せずして苦が終滅させられるということも説かないのである。さらにまた、私は、友よ、まさにこの想をもち意識をもった一尋(ヒ)ほどの身体において、世界と、世界の起因と、世界の滅と、世界の滅に導く道とを証智せしめるのである。」(48 頁)

まず、ここで言われている、「そこでは生まれることも、老いることも、死することも、没することも、再生することもないかの世界の終り」とは、上掲の釈尊の涅槃についての説明と同様のものであり、涅槃を意味している。この涅槃を意味する「世界の終り」は「行くこと」すなわち歩行によって知られたり、見られたり、到達されたりはできないと言われている。このことは、涅槃は世界すなわち現象界の一現象として現象界のどこかにあるものではないということの意味する。しかしながら、「私は、世界の終りに到達せずして苦が終滅させられるということも説かないのである」と言われる。釈尊は、「初転法輪」と言われる最初の説法以来、まさにこの「苦が終滅させられる」ということを説いてきたのである。したがって、この釈尊の言葉は、言外に「私は、世界の終りに到達することによって苦が終滅させられるということ説く」ということを述べていると解せられる。それでは、釈尊はいかなる仕方で涅槃を意味するその「世界の終り」に人々を到達させるのであろうか。それは、世界の中の極く微小なる存在である人間に「世界と、世界の起因と、世界の滅と、世界の滅に導く道とを証智せしめる」ことによってである。釈尊は「四つの聖なる真理」の説法において、彼が「聖なる真理」(ariyasacca)と呼んでいる「苦」、「苦の起因」、「苦の滅」、「苦の滅に導く道」という四つのものを証智すべきことを説いている。ここでは「苦」(dukkha)を「世界」(loka)に換えて同じことを説いているのである。このように、釈尊によると、世界とそれに関連した現象等を、或いは苦とそれに関連した現象等を証智することが、「世界の終り」としての涅槃或いは「聖なる真理」に到達することなのである。そうするならば、涅槃は、現象を超越した真理ではあるが、何らかの仕方で現象においてあるものであるということになるであろう。

次の説法の言葉も、釈尊が説く涅槃は何らかの仕方で現象においてあるものであるということを示しているものである。

「もし比丘が老死の厭離、遠離、滅によって取著なくして解脱している(vimutto hoti)ならば、現象において涅槃に到達している比丘(diṭṭhadhammanibbānappatto bhikkhū) と言うことができる。」(「相応部經典」第2巻18頁)(注；diṭṭhadhamma= diṭṭhadhamme 見られた法において＝現象において)

釈尊は、このように、そのことによって老苦死苦等の苦やその他の現象から解脱することになる、涅槃に到達することを説くのであるが、その涅槃は現象において到達されるものなのである。ということは、涅槃は何らかの仕方で現象においてあるものであるということである。

さらに、釈尊の重要な説法とされる「十二縁起の説法」も、涅槃或いは「聖なる真理」が現象に縁つてあるものであることを説くものであると解せられる。すなわち、例えば、「老死は生に縁つてある」は、ここでの老死(の苦)が涅槃或いは「聖なる真理」を指しているが故に、「涅槃は生に縁つてある」ということを言っているものと解せられるのである。(注6)

以上のように、釈尊が説く涅槃は、一方で、現象を超越した真理であるが、他方、それは何らかの仕方で現象においてある真理、現象に縁つてある真理、或いは、現象を貫いてある真理なのである。よって、涅槃は苦および一切の現象を貫き越えている真理であるということができるの



である。

## （２）涅槃への往生としての苦の超克

### （ⅰ）涅槃に導く道としての「三昧」

根本仏教においては、涅槃は、一方で、苦および一切の現象においてある真理であるが、他方では、それを超越している真理であった。したがって、このような涅槃に到るならば、確かに苦を超克することができるであろう。しかし、このような涅槃にはいかにして到ることができるのであろうか。

根本仏教において涅槃に導く道として説かれるものは「三昧」(samādhi 定)である。上掲の説法においても、「いかなるものが涅槃に導く道であらうか。止、これが、比丘達よ、涅槃に導く道である」と説かれていた。「止」(samatha 寂止、寂静)とは「定に七名ある中の一。動心を静息し煩悩を滅止し、心を一處に定止せしむること」(『佛教辞典』大東出版社)であり、或いはまた、「あらゆる想念を止め慮を息めて心が寂静になった状態」(『仏教学辞典』法蔵館)である。このような三昧が涅槃に導く道とされるから、釈尊の説法では、涅槃と共にまた三昧が絶えず説かれているのである。三昧は何か或る一つの事柄に心を集中することである。三昧の対象は坐することでも、念仏を唱えることでも、読経でも、禅宗の臨済宗でなされるように師匠から与えられた問題である「公案」を日夜考えることでも、歩行によって千日間昼夜ひたすら回峰することでも、その他何でも構わないのである。釈尊の時代では坐禅中に入息、出息に念をこらして集中する三昧行が行われていたようであり、「相應部經典」第5巻の「入出息相應」(Ānāpāna-saṃyuttaṃ)には、「入出息念」、或いは、「入出息念三昧」(ānāpānasatisamādhi)を説く、次のような類の多くの説法が載せられている。

「比丘たちよ、入出息念を修習し、多修するならば、大果・大功德があるのである。……比丘たちよ、ここに比丘があつて、或いは林野に行き、或いは樹下に行き、或いは空屋に行つて結跏趺坐し、身を正しく持し、念を面前に起こし、或いは念をこらして入息し、或いは念をこらして出息する。……」(313頁)

このような三昧行は或る物事に集中して、さらに何をなすものであろうか。それは「知」、或いは「観」である。よつて、釈尊によつて次のように言われるのである。

「比丘達よ、三昧を修習せよ。比丘達よ、三昧に入つた比丘は如実に証智する(pajānāti)。何を如実に証智するのであろうか。『苦はこれである』と如実に証智し、『苦の起因はこれである』と如実に証智し、『苦の滅はこれである』と如実に証智し、『苦の滅に導く道はこれである』と如実に証智するのである。」(「相應部經典」第5巻 414頁)

これは「四つの聖なる真理」の説法の一節であるが、これによると、三昧においては「如実に証智する」ということが起こるのである。そして、さらに、三昧においては、苦、苦の起因、苦の滅、苦の滅に導く道の、さらには、一切のものの、如実相＝聖なる真理＝涅槃を「これ」として証智するということが起こるとされるのである。

### （ⅱ）現象の完全知としての涅槃の証知

三昧は何らかの現象に集中するものであるが、これによつてその現象の如実相が証智されるとされた。現象への三昧によつてその如実相、真相を証智することは、現象を「完全知する」(parijānāti 遍知する)と言われる。この語及びこの語の名詞形「完全知」(pariññā 遍知)は原始經典において頻出している語である。現象を完全知するとは、現象の真相である真理(sacca)或いは涅槃を証知する(abhijānāti)ことである。次の釈尊の説法は、何らかの現象に念をこらして集中することが、やがて真理或いは涅槃を証知することに至るということを説いているものである。な

お、文中の「不死」(amata)は、上掲の通り、真理或いは涅槃の別名である。

「比丘達よ、ここに比丘が身(kāya)を觀じ、熱心、正智、具念にして、世間の貪欲憂悩を調伏して身の内に住している。身を觀じて身の内に住する時、彼には身が完全知されているのであり、身が完全知されていることによって不死が真証されているのである(kāyassa pariññatatta amatam sacchikatam hoti)。」「(相応部經典 第5巻 182頁)

このように、何らかの現象に対して念をこらして三昧になり、その現象を完全知することによって、涅槃が真証される、すなわち悟られるのである。そして、現象を通じて以外の仕方では、涅槃は証知されないのである。何故ならば、涅槃は現象において、或いは現象に縁って、あるものであるからである。かくして、現象の完全知が仏道修行の目的であるということも言われるのである。

『尊者サーリプッタよ、それを目指して沙門ゴータマのもとで仏道修行(brahmacariya)が修せられるところのものは何であろうか。』

『友よ、苦の完全知という目的(dukkhassa pariññattham)を目指して世尊のもとで仏道修行が修せられるのである。』(相応部經典 第4巻 253頁)

### (iii) 涅槃の証知＝涅槃への往生としての苦の超克

以上のとおり、現象に対し三昧になって現象を証智することは、やがてその現象を突き抜けて、その現象と一切の現象との真相であるところの涅槃を証知することになるのであった。

そして、さらに、その涅槃を証知することは、涅槃に到り成り、往生する“upasampajjati”(到達する、入る、往生する <upa=・・・のもとに親しく、sam= 集まり等しくなつて、pajjati= 行く) ことであるとされるのである。次の釈尊の説法は、現象を如実に証智することは涅槃を証知することであり、そして、涅槃を証知することは涅槃に往生することであるということを示しているものである。

「比丘達よ、『苦はこれである』と如実に証智し、『苦の起因はこれである』と如実に証智し、『苦の滅はこれである』と如実に証智し、『苦の滅に導く道はこれである』と如実に証智する修行僧(sammaṇā 沙門達)或いは修行者(brāhmaṇā 婆羅門達)は、彼ら修行僧或いは修行者が誰であれ、比丘達よ、修行僧に関してはまさに修行僧であると、修行者に関してはまさに修行者であると、私には認められるのである。しかも、彼ら尊者達は、修行僧の目的(attha)或いは修行者の目的を現象において(diṭṭhe dhamme 見られた法において)自ら証知し(abhiññā)、真証し(sacchikatvā)、それに往生して(upasampajja)住する(viharanti)のである。」「(相応部經典 第5巻 433頁)

この説法において、釈尊は、まず、苦、苦の起因、苦の滅、苦の滅に導く道を如実に「これ」として証智する修行者は真正の修行者であると説いている。この場合の苦以下の四つのものは一切のものの代表である。さらに、指示代名詞「これ」は、「四つの聖なる真理」を説く131經を集めている、「相応部經典」中の「真理相応」(Saccasaṃyutta)の殆んどの經(128經)において現れているものであるが、現象を貫き越えた「聖なる真理」或いは「涅槃」を指し示しているものである。したがって、「四つの聖なる真理」の説法は、一切のものは聖なる真理であるということを示すものであり、これが根本仏教の根本説であると考えられる。(注7) それはともかく、「聖なる真理」或いは「涅槃」は、そのためにこそ修行僧や修行者が存在する「存在理由或いは目的」(attha)である。これを真正な修行者は「現象において自ら証知し、真証し、それに往生して住する」と言われているのである。まさに、この説法は、現象を如実に証智することは現象において涅槃を証知することであり、現象において涅槃を証知することは涅槃に往生することであるということを示しているのである。

そして、涅槃に往生することは、涅槃は苦と一切の現象を超越しているものであるから、苦を

超克することなのである。このように、根本仏教における苦の超克は、現象に対し三昧になり、それを如実に証智する（完全知する）ことによって、それを貫き越えた、その如実相たる涅槃を証知して、その涅槃に往成する、或いは、往生することなのである。

### （３）苦の超克のあり方としての生への徹底

根本仏教における苦の超出は、涅槃を証知して現象を超越した涅槃に往生することであった。しかるに、その涅槃は、現象の如実相或いは真相として、現象においてあるもの、或いは、現象に縁ってあるものである。涅槃に往生すること＝涅槃を証知することは、現象を如実に証智すること或いは現象を完全知することなのである。そして、現象を如実に証智することは現象に対し三昧になることである。したがって、苦の超出＝涅槃に往生することは、現象に対し三昧になること、それに集中し徹することなのである。

かくして、釈尊が説く苦の超出は、我々の具体的なあり方としては、与えられた一々の生に集中し徹することであるということになる。よって、釈尊は次のような説法を行っているのである。これは、痛切な求法の思いを抱いて遠方から釈尊を訪ねてきて、托鉢中の釈尊に、「今はその時ではない」という何度もの断りにもめげず、切に教示を乞い続けたバーヒヤに対してなされたものである。

「しからば、バーヒヤよ、汝はこのように学ぶべきである。見た時には(ditthe=when seen)ただ見ただけで(ditthamattam=only seen)いよ(bhavissati=be)、聞いた時にはただ聞いただけでいよ、思った時にはただ思っただけでいよ、知った時はただ知っただけでいよ。バーヒヤよ、汝はまことにこのように学ぶべきである。バーヒヤよ、汝が見た時にはただ見ただけでおり、聞いた時にはただ聞いただけでおり、思った時にはただ思っただけでおり、知った時はただ知っただけでいよならば、バーヒヤよ、汝はそこにはいないのであり、バーヒヤよ、汝がまさにそこにはいないならば、バーヒヤよ、汝はこの世にも他の世にも両者の中間にもいないのであり、まさにこれが苦の終わりなのである。」[「自説経」(Udāna) 8 頁] (注 8)

釈尊はこの説法において一々の生に徹すべきことを説いていると解せられる。そして、一々の生に徹するならば、「そこに」も「この世にも他の世にも両者の中間にも」いないと言われる。これは、一々の生という現象に徹するならば、現象を超越した涅槃に往生しているということを言っているものと解せられる。そして、このことが苦を終滅させること、苦を超克することであると言われているのである。

根本仏教における苦の超克は涅槃に往生することであるが、その涅槃は現象において或いは現象に縁ってあるものであるものであるから、現象に三昧になることであり、具体的には各自に与えられた一々の生を誠実に、一所懸命に生きることであるということができであろう。

最後に、このようなことを説く釈尊の仏教が遙か後世の遠い日本にまで伝えられているということを示す二つの言葉を掲げて、この小論を閉じることにする。

「仏となるに極めて容易な道がある。諸々の悪をなさず、生死に執着する心なく、一切衆生のために憐れみ深くして、上を敬い、下を憐れみ、よろずのことを厭う心なく、願う心なく、心に思うことがなく、憂えることがない、これを仏と名付ける。また他に尋ねることなかれ。」

これは、道元(1200-1253)がその著『正法眼蔵』の「生死の巻」末尾で述べていることであるが、これによると、涅槃に往生することである、したがって苦を超克することである「仏となる」ことは、自分に与えられた生を誠実に、それに徹して生きることなのである。

「災難に逢う時節には災難に逢うがよく候。死ぬる時節には死ぬるがよく候。これはこれ災難をのがる妙法にて候。」

これは、良寛(1758-1831)が大地震による災難に逢った知人に書き送った手紙の一節であるが、

これによると、自分に与えられた生がたとえ災難に苦しむ生であったとしても、なお最善を尽くしてその災難に対処するといった仕方での生に徹することが、「災難をのがるる妙法」、すなわち「苦を超克する妙法」なのである。

(注)

1. 釈尊の誕生年と死亡年とは現在確定してはいず、他に 566・486B.C.等と諸説がある。本論では仮に中村元著『原始仏教 その思想と生活』（1970 日本放送出版協会）35 頁に記載されている中村氏の説に従うことにした。
2. 宇井伯壽氏は、涅槃において渴愛は「制し切」られていると述べられ、必ずしもそれが消滅しているとは見なされていないようにも思われるが、氏にはまた「愛を滅し愛を制する」（上掲『佛教思想の基礎』171 頁）とか「仏は愛のない人であります。愛を全く征服することの出来た人であります。」（同 96 頁）とかの言葉もある。
3. 苦悩は、欲望が存してそれがかなえられないことから生ずるということについて、宇井伯壽氏は次のように述べている。「・・・愛を有っているから、総てのものが其の愛の向かう通りに、即ち、要求する通りに、副うて来ない、それが苦である・・・従って愛を有って居るというのが苦の理由であり、根拠であり、条件である。」（上掲『佛教汎論』166 頁）
4. 筆者は、下記の拙文において、釈尊の「縁起の説法」の新しい理解の試みを行った。  
「釈尊の縁起の説法の真意について」（福井工業大学研究紀要 第 38 号 第二部 2008 年 5 月）
5. この説法からも、釈尊が説く「智慧」（paññā 般若）は「聖なる真理」の知であるということ、さらに、「苦」、「苦の起因」、「苦の超越」、「苦の寂滅に導く聖なる八支の道」そのものが、「四つの聖なる真理（四聖諦）」の説法におけると同様に、「聖なる真理」とされているということがわかる。
6. 筆者は、注 4. で挙げた拙論「釈尊の縁起の説法の真意について」において、釈尊の「十二縁起の説法」は、「聖なる真理は現象の生滅に縁つてある」ということを説くものであると解した。なお、「老死は生に縁つてある」における「老死」が「聖なる真理」を指していることについても同拙論を参照されたい。
7. 筆者は、下記の拙文において、釈尊の「四つの聖なる真理」の説法の新しい理解の試みを行った。  
「釈尊の『四つの聖なる真理』の説法の真意について」（福井工業大学研究紀要第 39 号第二部 2009 年 8 月）  
この論考において、筆者は、この説法は「一切のものは聖なる真理である」、及び「一切のものは聖なる真理であると証智する道は三昧である」という根本仏教の根本説を説くものであると解した。
8. この後、バーヒヤは、この釈尊の教示によって即座に悟ったこと、しかし、この直後、釈尊の許を離れ通りを歩いていた時、子牛をバーヒヤから引き離そうとした牝牛の角に突かれて死んでしまったこと、さらにこれを知った釈尊は、弟子たちに命じて、死体を手厚く荼毘にふし、彼のために塔を建てたこと等が記されている。

参考文献

- ① Saṃyutta-Nikāya（相応部經典） Vol.1～5, The Pali Text Society (London), 1970～1976
- ② Aṅguttara Nikāya（増支部經典） Vol.1～5, The Pali Text Society (London), 1961～1981
- ③ Udāna（自説経） The Pali Text Society (London), 1982
- ④ Itivuttaka（如是語経） The Pali Text Society (London), 1975
- ⑤ 『佛教汎論』 宇井伯壽 1962 岩波書店
- ⑥ 『佛教思想の基礎』 宇井伯壽 1963 大東出版社
- ⑦ 『仏教要語の基礎知識』 水野弘元 1972 春秋社
- ⑧ 『仏教学序説』 山口益、横超慧日、安藤俊雄、船橋一哉 1961 平楽寺書店
- ⑨ 『仏教思想入門』 山口益 1968 理想社
- ⑩ 『原始仏教 その思想と生活』 中村元 1970 日本放送出版協会

（平成 22 年 3 月 31 日受理）